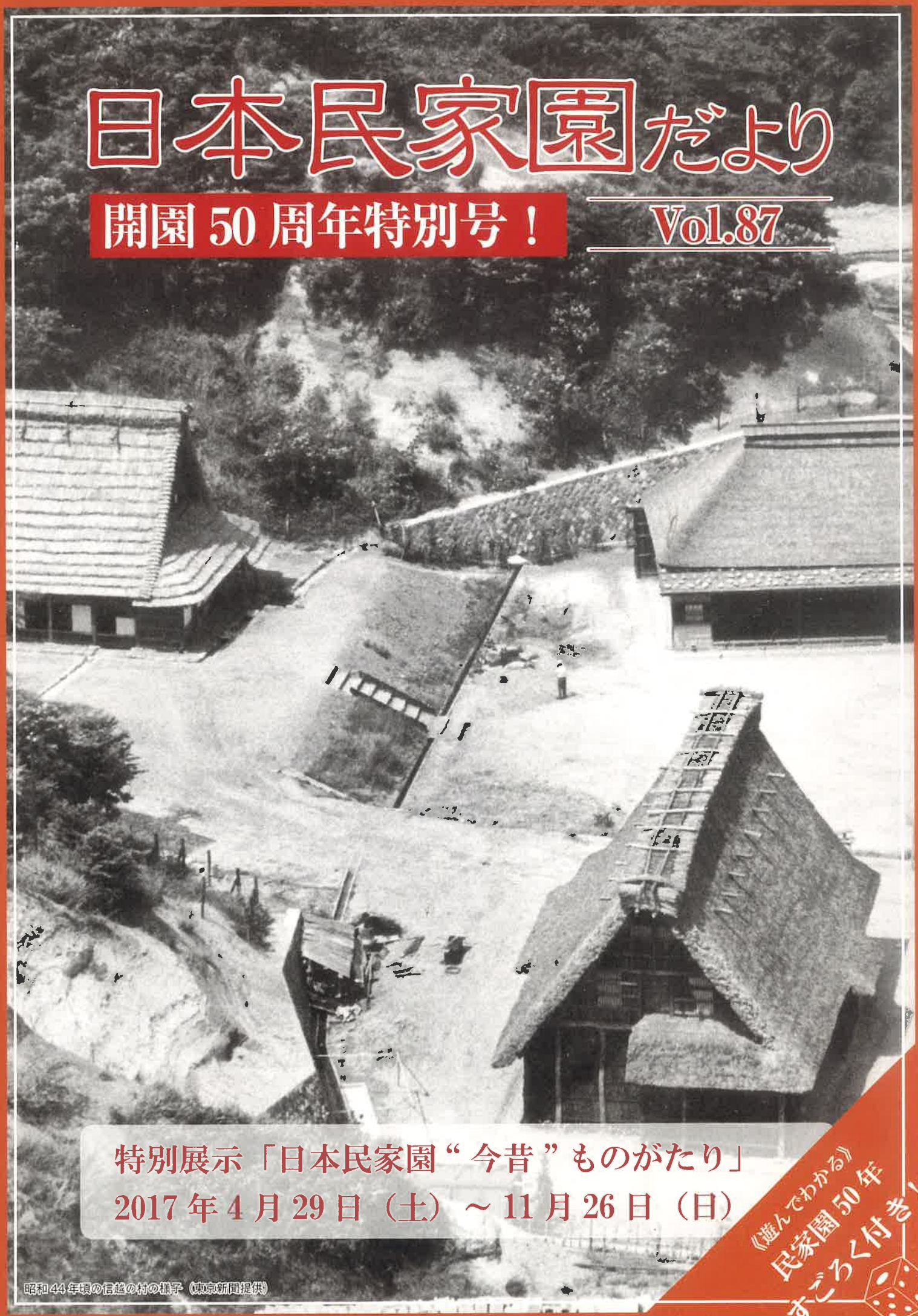
# 日本民家園だより

## 開園50周年特別号！

Vol.87



昭和44年頃の信越の村の様子（東京新聞提供）

特別展示「日本民家園“今昔”ものがたり」
2017年4月29日（土）～11月26日（日）

《遊んでわかる》
民家園50年
すごろく付き！

# 民家園のはじまり
## －伊藤家発見～開園～移築復原時代－

### 1、「住まい」の民家から「文化財」の民家へ

遡ること50年前の昭和42（1967）年4月1日、川崎市立日本民家園は開園の日を迎えました。昭和40年代の川崎といえば、公害問題がクローズアップされ住環境の悪化が懸念される一方、農村地帯にはまだ茅葺屋根の民家が点在しているといった状況でした。高度経済成長期の真っただ中にあって、産業や経済の発展に伴い都市開発が進み、生活は豊かになり、人々の生活スタイルも大きく変化していました。そうした中で伝統的な民家での暮らしというのは、時代にそぐわないものとみなされていくようになっていきます。室内は暗く埃っぽく、定期的な屋根の葺替えなどの手間もかかり、水回りを始めとして生活していく上での不便さが指摘されました。都市開発で周辺に新しい家が立ち並び始めるようになると、先祖が建て、代々大事に守り伝え続けて来た家々でさえも、時代の流れの中で失われていくことになりました。

一方で民俗学や建築史の研究者により、古い民家の調査研究が行われ、また民芸ブームなどに乗じて古い民家の価値を見直す機運が生じる動きもありました。ことにダム開発で集落丸ごとが失われる定めとなってしまった白川郷・五箇山の合掌造りなどは、その特異な形態とも相まって注目を集め、各地に移築され料亭などとして利用される例が相次ぎます。建築的評価としては、昭和30年代東京大学・横浜国立大学・大阪市立大学などの研究者による調査を皮切りとし、文化財保護委員会による宮崎県始め7県の調査、さらに文化庁による全国の都道府県での民家緊急調査がなされたことにより、民家史の研究は大きく発展を遂げていきました。これらの調査などを通し、いくつかの民家は重要文化財に指定されることになります。日本民家園に移築された民家の第一号である「旧伊藤家住宅」もそのうちの一棟です。

### 2、旧伊藤家住宅の発見と移築問題

旧伊藤家住宅は昭和30（1955）年、当時横浜国立大学の学生だった関口欣也氏による川崎市金程（現麻生区）の農家建築調査によって見出されたことが、建築的価値評価の端緒でした。その後、昭和35（1960）年に関口氏と横浜国立大学の大岡實教授が中心となって行った調査により、伊藤家住宅は県内最古の部類に属し、なおかつ保存状態も良い県内有数の民家であるとの評価を受けました。しかし、昭和38（1963）年2月に伊藤家では建て替えを計画し、伊藤家住宅は取り壊されることが決まります。これを惜しんだ大岡・関口両氏は、伊藤家住宅の横浜三渓園[注1]への移築を計画し、併せて重要文化財の指定を申請しました。

移築前の伊藤家住宅［昭和37（1962）年］

当時、稲田図書館長で文化財保護も担当していた古江亮仁氏は、昭和39（1964）年2月に伊藤家住宅を訪れた際に、三渓園への移築計画を知り、重要な文化遺産を市内に残すため関係各所へ働きかけます。川崎市は伊藤家住宅の生田緑地への移築保存を検討しますが、文化財保存の実績がある三渓園への譲渡がすでに決定しており難しい状況でした。相談に訪れた市関係者に対して大岡教授は、①三渓園への移築保存以上のメリットを示すこと、②市の枠を超えて文化財建造物を幅広く保存できる施設とすることとの考えを示しました。移築には横浜市も携わっていたため、神奈川県議会議員斎藤文夫氏らが奔走し、ついに飛鳥田一雄横浜市長にも了承を得ます。その後、金刺不二太郎川崎市長と面会した大岡教授は、伊藤家住宅を川崎市に保存することを認め、あわせてスウェーデンのスカンセン[注2]のような野外博物館の建設を要望しました。金刺市長はこれに賛同し、このようにして日本民家園は誕生することとなります。

### 3、日本民家園開園

旧伊藤家住宅の移築復原が行われたのを皮切りに、次いで生田緑地近くの登戸から旧清宮家住宅が移築されました。この時期に大岡教授と古江氏は、移築する古民家を選定するため、日本各地の古民家を訪ね歩いています。富山県五箇山地方の調査も同時期に行われ、その際発見された野原家住宅が民家園に移築復原されることとなりました。

日本民家園開園の日［昭和42（1967）年4月1日］
左から3人目が初代古江亮仁園長

造成をしたばかりで草木もほとんど育っていない敷地に民家がポツンと3棟移築された時点で、日本民家園は開園の日を迎えます。そして記念すべき開園の日は、なんとお客さんは0人でした。当時の職員5名は、警備担当者2名を伴って園内を案内したと語っています。その後信越の村（当時は中央山地コーナー）に旧江向家住宅・旧佐々木家住宅、神奈川の村（当時は神奈川コーナー）に旧北村家住宅が移築復原されて6棟となります。さらに旧作田家住宅・旧広瀬家住宅・旧太田家住宅が移築され、関東の村と信越の村を繋ぐトンネルも完成し、博物館の規模は年々拡大していきました。

信越の村（手前）と復原工事中の旧作田家住宅（奥）
（東京新聞提供）

注1：三渓園
横浜市中区に実業家原富太郎（号・三渓）により造園された日本庭園。園内には歴史的に価値の高い建造物が移築されている。
注2：スカンセン
1891年に設立された世界で初めての野外博物館。スウェーデン各地から伝統的家屋が移設されている。世界中の野外博物館のモデルとなっている。

## The Beginning of Minkaen

-With the discovery of the Itō House, the museum opened further relocations and restorations-

The Japan Open-Air Folk House Museum opened 1st of April, 1967. It was the time that the number of traditional folk houses had been decreasing, due to the gradual change in people's lifestyles from rapid economic growth. Consequently, the researchers of folklore and architecture started to carry out the intensive survey on folk houses and they were designated as important cultural properties. The Itō House is one of those houses.

The Itō House was to be demolished in 1963, while its cultural value had been highly evaluated by Professor Minoru Ōoka and Dr. Kinya Sekiguchi from Yokohama National University. They both disagreed with the decision and planned to relocate the house to the Yokohama *Sankeien* Garden.

The public officials of the Kawasaki city felt unsettled, as their local important cultural property was about to be taken out from the city. Professor Ōoka in turn suggested opening the museum that restores the traditional folk houses around Eastern Japan, including the Itō House, and the Mayor Kanesashi of Kasawaki city agreed on his plan. This was how the museum came into being.

The Japan Open-Air Folk House Museum opened with three houses. Two houses relocated after the Itō House, some other houses from the Shin-Etsu and Kanagawa area moved into the museum, then the tunnel had been built, leading to the Kantō area. The scale of the museum had gradually been extended.

# 広がる活動
## －博物館発展時代－

### 4、広がる活動、高まる魅力

民家などが次々と移築される一方、日本民家園では建物以外の分野もますます発展していきます。民家内や軒先では、旧来から農家の人などが伝統的に作ってきたわら細工や竹細工などの手仕事の技能を来園者に見てもらう実演会が開催されました。そして、これらの技術が失われる危機に瀕している状況を鑑みて、昭和49（1974）年、技能を伝承していくため民具製作技術保存会（通称民技会）が設立されました。以来、民技会は、伝統的技術の伝承と園内での民具製作実演を今日まで続けています。さらに船越の舞台が移築されてからは、伝統芸能の公演も行われるようになりました。日本民家園は失われつつある無形のものをも守り伝える場としてもますます発展していくことになります。

船越の舞台における「第１回民家園まつり」の様子
［昭和57(1982)年10月］

### 5、博物館構想の集大成と大事故

昭和51（1976）年、それまで旧岩澤家住宅が建てられている場所にあった事務所が、現在の場所に移りました。なお、この昭和51（1976）年10月1日より、それまで名簿に記名してもらうのみで入園無料できたところを、有料に変更しています。以降も毎年少しずつ工事が進められ移築建物は増加し、昭和60年代に入ると、屋内展示施設を伴った新たな本館建物の建設構想が練られ始め、それに伴い中原区小杉陣屋町の原家住宅を本館付属施設として移築することも決まります。新規移築工事が数を減らし話題性が低下したためか、入園者数が落ち込みがちな状況を打破する新たな起爆剤となることが期待されました。

そんな時期に、大きな事件が起こりました。平成2（1990）年7月29日、生田緑地内での花火が飛び火し、旧太田家住宅主屋の大半が被災するという大事故が発生したのです。しかし、被災した旧太田家住宅は多くの関係者の尽力により文化財指定解除を免れ、復旧工事に取り掛かることが決まりました。この苦い経験となった事故は徹底的に調査され、今後二度とこのような事故を起こしてはならないという戒めを得て、関係者一同改めて文化財を守り続ける者の責任の重大さを痛感することとなったのです。そして平成4（1992）年3月には旧原家住宅が竣工し、7月には博物館本館が完成しました。遅れて10月には旧太田家住宅の復旧工事も完了し、日本民家園は再スタートを切ることとなったのです。

被災した旧太田家住宅［平成2(1990)年7月］

平成4年度・5年度には山形県と富山県での雪囲い調査が行われました。調査成果をもとに園内でも雪囲い展示を始めたことを端緒として、ボランティアグループ「炉端の会」が発足することとなります。囲炉裏に火を入れることは建物の維持にも有効であること、火が焚かれ室内に人がいる風景が展示物としての民家をより豊かなものに見せること、炉端の会は様々な期待を背負って平成6（1994）年に正式に設立されました。現在では囲炉裏端での来園者のもてなしや民家の案内、園内のガイド、展示活動などをはじめ、花壇の整備や草バッタの製作にと活躍の幅を広げています。

旧菅原家住宅雪囲いの様子［平成6(1994)年］

## 6、日本民家園 50 歳、まだまだこれから

一時期は入園者数が 10 万人を下回りましたが、平成 18 年度以降は回復の兆しを見せ、また SNS などのメディアの発達も伴い海外からの来園者が増加傾向にあります。行事は多様化し、各古民家の旧所在地の自治体との交流事業が繰り広げられるようになりました。平成 26 年度には、開園時からの総入園者数 600 万人超えを達成しました。

一方で、平成 23（2011）年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、大きな被害は受けずに済んだものの、安全を考慮して数日間臨時閉園の措置をとりました。博物館に展示する文化財建造物といえども、人々に安心して見学してもらうためには、耐震などの面で安全性を考慮する必要があることを再認識させられたのです。老朽化してきた防災設備を一斉リニューアルし、古民家についても耐震補強工事を徐々に進めています。

旧鈴木家住宅耐震工事の様子

現在展示されている文化財建造物は、国指定重要文化財が 7 件、神奈川県指定重要文化財が 10 件、川崎市重要歴史記念物 7 件、国指定重要有形民俗文化財が 1 件です。すべての建物が私たちの宝物であり、そして後世に受け継ぐために守り続けていかなければならない物です。文化財としての価値を伝え、同時に大切に使い続けていくことも、大事に守り続けるためには欠かせないことです。

かつて初代古江園長は、日本民家園の目指すべき姿として「国民共通の『ふるさと』」という理想を掲げました。今では「ふるさと」としてこのような古民家が並び立つ姿を、実際の記憶として持っている人も少なくなってしまいましたが、それでも日本民家園に来ると「ふるさとに帰ってきたようでほっとする」ーそんな気持ちになれる場所でいつまでもあり続けるために、50 年目を迎えた日本民家園はこれからも歩み続けていきます。

## The Expansion of Role of the Museum

-Towards the advanced museum-

As more folk houses had been relocated to the museum, various events had been taken place. In 1974, the Association of Preserving Art and Skills of Folk Crafts (*Mingu-Seisaku-Gijyutsu-Hozonkai*) had been established, and its members started to lecture and demonstrate how to weave on a hand-loom, and how to make straw and bamboo crafts. Later, the traditional performing art events were also started to be held in the museum.

In summer 1990, a small spark from the Ikuta Ryokuchi Park flied on to the roof of the Ōta House, and most of the house burned down. Fortunately, the Ōta House had been recovered to the sufficient state afterwards, and the construction of the main building had been completed in 1992, together with the reassemble work of the Hara House, the museum had been re-opened.

In 1994, the volunteers' group "*Robata-no Kai* (The Fireside Association)" had been established. The members of the group kindle the fire of sunken hearths (*irori* fireplace) and communicate with guests, explaining about the houses.
The number of visitors to the museum decreased to a hundred thousand at some point, the visitors from overseas increased every year instead. In 2014, the number of entrants finally reached to six million since its opening.

After the Great East Japan Earthquake in 2011, the quakeproofing work has been carried out on the folk houses to keep visitors safe from earthquakes.
We wish to make Minkaen a comfortable museum to make people relaxed like they are in their hometown. After fifty years, the museum will continue to be a cherishing place for visitors.

# 民家園のお仕事・建築編
## －古民家が移築復原されるまで－

日本民家園の建物は、全て「移築復原工事」が行われました。民家は、生活の変化に応じて数多くの改造が加えられていきます。そういった改造の痕跡は、何らかの形で建物に刻まれ残ります。その痕跡を調査し、建てられた当初の形を推察し、その形に建てることを「復原」といいます。

### 1、解体前の現状調査

建物の解体に着手する前に解体前の状態の調査が行われます。

### 2、解体＋調査

民家は木の組み合わせで作られているので、組み立て時と逆の手順に従えば、破壊することなくほどいていくことが可能になります。

解体時の調査は、解体前には見ることのできない箇所に注目します。旧北村家住宅では墨書が発見され、建物の建築年代を知ることができました。

### 3、輸送

解体した部材を整頓して、移築の目的地である日本民家園に移送します。

### 4、復原調査

移送した部材を一つ一つ確認し、解体時の痕跡調査記録と合わせて「復原案」を検討します。

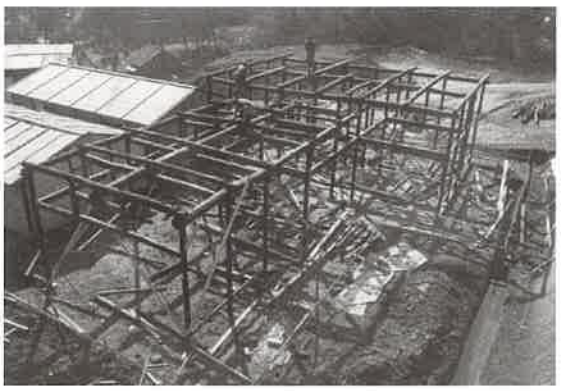
### 5、復原工事

#### 5－1、地形

まず敷地の地面をしっかり突き固め、礎石を据え付けます。さらにその上から再び突き固めます。

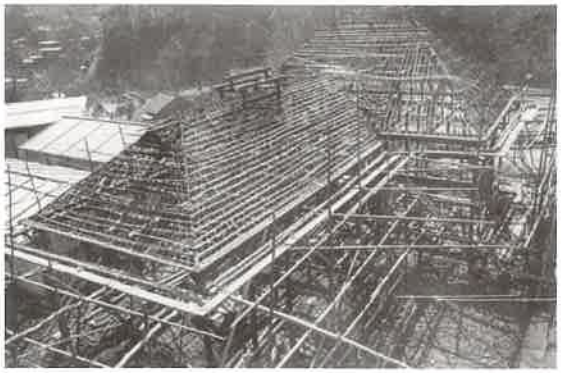
#### 5－2、軸組み

礎石の上に柱を立て、梁や桁、貫などの横架材とつなげることによって、建物の屋根より下部分の主構造（軸組み）を組み上げます。



#### 5－3、小屋組み

屋根の骨組み「小屋組み」を作る工事が行われます。屋根の頂部の「棟」を上げる作業は、家にとって最も重要な要素であり、「棟上げの祝い（上棟式）」が執り行われます。



#### 5－4、屋根葺き

茅・板・瓦などを使い屋根が葺かれます。

#### 5－5、壁・床・天井などの造作

屋根が葺き上がると建物の骨組みに肉付けをしていく作業が行われます。

#### 5－6、建具等を入れる

最後に建具や畳などを収める造作仕事をします。

### 6、報告書作成

文化財建造物の修理工事や調査が行われると、報告書が刊行されます。これは、調査や修理の内容や結果を文書及び図面・写真により詳細に報告したものです。貴重な学術資料として研究者の利用に供されています。

# 民家園のお仕事・民俗編
## －民俗資料が収蔵されるまで－

日本民家園には、古民家とともに、家の旧所有者や旧所在地周辺で使われていた民俗資料が約３万点収蔵されています。民俗資料の収集は、古民家の現地調査と同時期の昭和40～50年代にかけて行われました。これらの資料は、その家や地域の暮らしを知るための貴重な資料です。ここでは、民俗資料がどのように収集され、民家園で保存・活用されているかをご紹介します。

### １、民俗調査

資料収集の前に、まず移築古民家に関する民俗調査が行われます。対象は、移築古民家とその周辺集落にまで及びます。聞き取りや観察を通して、その古民家や地域での暮らしに関する基礎データが集まると、そこからどのような民俗資料があるか情報を抽出します。

どのように道具を使ったか現地の人から話を聞く

### ２、展示計画をたてる

古民家がどのような姿で民家園に移築復原されるかを考慮して、民俗資料をどのように展示活用するか計画を立てます。

### ３、民俗資料の収集

民俗資料であれば何でも収集すればいいというわけではありません。展示計画に基づいて、必要な民俗資料を収集します。収集活動は、その地域の自治体や地元の人たちと協力して行なわれます。

家々から集められた民俗資料

### ４、民俗資料の受け入れ

民俗資料の旧所有者との間で寄贈の手続きが済むと、次に大本となる原簿が作成されます。さらに個々の民俗資料のカードが作成され、全ての民俗資料をリスト化した目録が出来上がると、いよいよ日本民家園に民俗資料が運ばれます。

搬入された民俗資料

### ５、民俗資料の整理

搬入した民俗資料は清掃されたあと、個々の資料番号が書き込まれます。そして、一点一点写真撮影され、大きさを計測し、図面を作成します。

民俗資料の写真撮影

資料の情報をカードに書き込む

### ６、収蔵・展示

全ての整理作業が済むと、ようやく収蔵されます。収蔵された民俗資料は、古民家の中に展示されるほか、企画展示などの機会を通して公開されます。

# 写真でたどる民家園 50 年

警備員着任式(昭和 45 年)

民具製作実演(昭和 47 年)

D51 型機関車の組立作業を見守る旧佐々木家住宅(昭和 45 年)※

船越の舞台落成記念式典(昭和 50 年)

畳修理を見学する来園者(昭和 50 年)

市民無料開園日(昭和 54 年)

本館常設展示室準備(平成 4 年)

開園 35 周年沖縄芸能公演(平成 15 年)

日本のにわとり展(平成 12 年)

炉端の会発足 20 周年(平成 27 年)

新消防設備一斉放水試験(平成 26 年)

本文執筆:原未織(1～5 頁)、関悦子(6 頁)　英訳:千葉昌子　すごろく:原未織(構成)、小澤葉菜(デザイン)
※撮影:三井庄吉氏(三井氏ご遺族提供)

**日本民家園だより　Vol.87　発行:平成 29 年 4 月 29 日**

**川崎市立日本民家園　URL　http://www.nihonminkaen.jp/**
〒 214-0032　川崎市多摩区枡形 7-1-1　TEL　044（922）2181　FAX　044（934）8652
交　通　小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩 13 分
開園時間　[3 ～ 10 月] 9 時 30 分～ 17 時 [11 ～ 2 月] 9 時 30 分～ 16 時 30 分（入園は閉園 30 分前まで）
休 園 日　毎週月曜（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土・日曜の場合は開園）、12 月 29 日～ 1 月 3 日
入 園 料　一般 500 円、高校・大学生 300 円、65 歳以上 300 円（川崎市在住の方無料）、中学生以下無料